

寂聴記念会だより

みなさま、お変わりございませんか。
風薫る5月。寂聴さんは、お元気なら
104歳になります。

寂聴さんが『余白の春』で描いた金
子文子は今年、没後100年を迎えま
す。世界各地で浜野佐知監督の映画が
紹介されて話題となり、韓国開慶（ム
ンギョン）市では命日の7月23日にシ
ンポジウムが開かれます。

1971年、寂聴さん（当時は晴美）
は、文子の生存していた同志たちと、
韓国にある誰も訪れることのない草に
埋もれた文子の墓に参りました。また、
1973年には、山梨の文子の母の実
家に位牌を作って送り、初めて文子の
法要もおこなわれました。寂聴さんも、
文子が広く知られ始めたことを喜んで
おられることでしょう。

寂聴『余白の春』展開催中

徳島県立文学書道館の瀬戸内寂聴記
念室では企画展「寂聴『余白の春』」
— 激烈な金子文子の人生 — が開催されて
います（2027年3月22日まで）。
寂聴の直筆原稿や文子の法要に参列し
たときの写真などが紹介され、展示内
容をまとめた小冊子も配布しています。



1973年4月29日 山梨にて
中央が晴美 文学書道館提供

上映会 「金子文子 何が私をこうさせたか」

6月7日（日）に瀬戸内寂聴記念会
主催で浜野佐知監督「金子文子 何が
私をこうさせたか」上映会を開きます。

第8号

2026年
5月15日発行

瀬戸内寂聴
記念会

題字
島田聖翠

徳島駅前のシビックセンターさくらホー
ルにて、10時30分、13時30分の2回、
上映します。ただいま、前売り券を県
内書店で発売中です。どうぞお友達を
お誘いください。記念会会員に限り、
当日も1000円で販売します。この
日、トーク・サイン会をする予定だつ
た監督は、ドイツの「日本映画祭」か
ら招待を受けて出席するため、徳島に
来られなくなり、代わりにビデオレター
を上映する予定です。

総会のお知らせ

ただし、6月20日（土）14時から、
文学書道館の講座「芸術・文化を語る」
第1回として、浜野佐知監督の講演
（無料）が計画されています。帰国し
た監督から、ドイツでどんな反響があつ
たかをお聞きするのも楽しみです。映
画を観て、講演を聞きたいものです。
講演申し込みは文学書道館に5月6日
までとなっています。

金子文子

何が私をこうさせたか

現に在るものをぶち壊すのが私の職業です

2026年6月7日（日）
徳島市シビックセンター さくらホール
①10時30分 ②13時30分

チケット 一般 前売り1000円 当日1300円
小学生～大学生 前売り、当日とも500円
取扱店 平野書店（全店） 小山助学館 富嶺書店（徳島店）
問い合わせ先 kikanshi@setouchijakuchou.com

主催 瀬戸内寂聴記念会 協賛 徳島でみえない映画をみる会
後援 徳島新聞社 徳島放送局 毎日新聞徳島支局 徳島新聞徳島支局

浜野佐知監督作品・主演 菜葉菜

100年前の反逆者、金子文子の死刑判決から自死に至る121日を映画化！

映画「金子文子 何が私をこうさせたか」を観て

徳島上映会よりひとあし先に、試写会や大阪で鑑賞した3人の会員から映画の紹介を兼ねて感想を寄せてもらいました。

新たな世界を思う力

竹内紀子

全編を通して、ゆるみなく緊張感の持続する映画だった。監督が文子と四つに組み、真正面から文子を描いている。監督は「自分の集大成、渾身の力をこめた」と試写会でおっしゃっていた。

まず、菜葉菜さんが文子になりきっていたのには初めから驚いた。文子を体現し、抵抗し続けた短い一生を演じきった。

権力社会、男社会、旧憲法の天皇制の世の中に、彼女は自分の言葉で抵抗し、自分を生きようとした。虐げられ続けてきた者には、よりよい世界を思い描く力があり、想像力がある。ひとりで生きるようになって英語や数学を学ぶために夜学に通った文子には、この社会はおかしいと思えた。最先端の思想書も読んでいた。タテ社会の権力につながっている硬直した男たちには、保身や昇進しか頭になく、違う世界を思い描く余裕も能力もない。

看守や教師の女性たちには文子に

共感し、理解しようとする柔軟さがある。

若い娘に、文子は、「書くことで考えるから、書いてみよ」と話し、書くことの大切さが強調される。文子が刑務所内で自伝を書いたからこそ、それが「すだれ」のように切れ切れにされて仲間のもとに届いたとしても、彼女の一生がわかり、考えたことは残された。100年後の現在に届いたのである。もちろん、その途中に寂聴さんの『余白の春』もある。表現し続け、バトンを渡すことで、よりくつきりと姿を現し、見えてくるものがある。その一端を私たちは担いたいと思う。

100年前のバトンを受け取る

賀来真留加

一足先に大阪の映画館にて映画『金子文子 何が私をこうさせたか』を観てきました。素晴らしい映画でした。以前、寂聴さんの金子文子の評伝『余白の春』を読書会で取り上げましたが、難解だった：などの意見も多かった。でもこれは映画ということもあり文子の思想とかよりは、女性同士の連帯を中心に描かれています。例えば他の女囚とか婦人教師、女監取締などがどう彼女に影響されていくのか、そこが見どころ。女性の映画でした。なので強く共感できます。

実は記念会でも、「監獄の場面が多く暗い映画かも……。日曜に上映する映画ではないのでは？」という不安の

声もありました。確かに暗い場面もありますが、けれども希望を描いた映画です。もちろんショッピンゲモールのシネコンなど大手の映画館で上映するような映画ではありません。でも見終わつたあと、大きな何かが確実に胸に残る作品です。エンドロールで謝辞「瀬戸内寂聴記念会」の文字を見た時、誇らしかったです。地方でこんな映画が観られるのは、大変価値があります。劇中で、文子が自分の命より大事なものを何かに託すシーンがあります。未来に大切な何かを託していく、という意味で瀬戸内寂聴記念会の理念とも重なります。100年前の文子からのバトンを、浜野佐知監督を通して私たちが受け取るのです。

映画『金子文子』に聴く

言葉の力

大石征也

百年前の反逆者を描く映画『金子文子 何が私をこうさせたか』の本質、その現代性については、すでに多くの識者のコメントがある。ここでは屋上屋を架すことなく、小動物に心を寄せることから、近づいてみたい。「おい、もっとマジメにやれ！」と、浜野監督に叱られそうだけれども。

文子が懲罰房に投げこまれた夜、雨になるシーン。後ろ手に縛られた彼女の前に、飯

が置かれ、虫が這う。黒いので一瞬ゴキブリかとおもうのだが、ちがう。エンマコオロギなのだ。即座に私は尾崎翠原作の『こほろぎ嬢』を想った。また、死を決意した文子が見上げる高窓を小鳥が訪れるシーン。映画『百合子、ダスヴィダーニヤ』の夫婦相克の場面で、鳥籠の鳥を放つのも、一羽だけ戻つて来、「小鳥さえ帰ってくるのに、君は……」みたいなセリフを大杉漣の荒木茂が言う。なつかしかった。旦々舎の自主制作作品をつなげていくと、『金子文子』が突発的に生まれたのではないのがよくわかる。『百合子』で湯浅芳子を演じた菜葉菜さんの成長ぶりも。いや、「成長」などと言つては失礼だろう。菜葉菜さんは「なりきっている」レベルを超えていた。金子文子そのものだった。映画はむしろ、映像の力によって観客を魅了する。だが、『金子文子』は、映像のみならず、言葉の力がメガトン級だ。とりわけ、自死へのスプリングボードとなる、何者をも怖れぬ文子の熱い信条吐露。



寂聴文学を愉しむ会⑩
「鴛鴦」を読む 2月20日

「鴛鴦」梗概

瀬戸内晴美は大逆罪で死刑になった管野須賀子を描く「遠い声」連載中（1968年3～12月「思想の科学」）に、幸徳秋水の離縁された二番目の妻であった千代子が最近まで生きていたということを知り、驚いた。そして、この人のことも書かねばならないと「鴛鴦」（1968年7月「文藝春秋」）に仕上げた。

千代子は東京の片隅で、死刑になった秋水を想いながら、ひとりで生き抜いた。養子に「弱そうでいて、結局、おばあちゃんが一番芯は強かったんじゃないの」とも言われている。千代子は一羽の鴛鴦を描き遺した。一羽は早く世を去った。自分は遺された。さびしいけれど、もう一羽を誇りに自分は生きていく。その意志を感じながら。

千代子は病弱であったため、英・仏語を学ばされ、独身でも生きていくようにと育てられた。また幼時から父の本棚に中江兆民の本を見て、自由民権の思想こそ真理だと思っていた。秋水を理解し支えることができる女性であった。しかし一方の、夫を奪った管野須賀子は、幼いときから継母の策略で凌辱を受けるなど、世間への敵愾心をもち続けて生きてきた。秋水に共鳴すると、同志として、共に行動のでき

る女であった。今まで出会ったことのない女であつただろう。その恋は長くは続かなかつた。周囲は寒村という夫がいながらの須賀子と秋水の恋愛に、一斉に去つてしまった。その後監獄で、秋水は仲間「死に水を取ってくれるのは千代子」という言葉を吐く。その言葉を信じ、千代子は望まれるまま、差し入れなどの世話をし、これが最後と上京した姑と泣き明かす。

離婚されても、送金を続け、手紙を送つてくる秋水を拒めなかつたし、その主義を自分も理解できる。千代子は物事を一歩引いて見ることで教養のある女でもあつたのだろう。長い目で見れば、本当の「同志」であつたかも知れない。

参加者の感想から

- ・冒頭と最後、「霧がわいてくる」という言葉が照応している。歴史的事実を入れる、面白い書き方。鴛鴦は一羽しか描かれていない。最初から一羽しか描く気がなかつた。タイトルにしたのはうまい。「鴛鴦」が書かれた時期は、寂聴さんが純文学に軸足を移そうという時期であつた。作品の充実感、油が乗りきつたときの仕事である。
- ・「遠い声」を読んでいるので、いつそう心に迫る。師岡千代子の視点で書いている。嘆き節、恨み節、怨念のように聞こえた。「源氏物語」の

中の六条御息所の怨念に近い。「タ イタニツク」を思い出した。寝たきりの老婆が若い頃を回想する書き方。鴛鴦の絵―僕はある種の自己憐憫、皮肉をこめて自分を描いたと思う。秋水という幻想、夢にすぎりたかつたのかなと思う。自分は秋水に愛されていなかった。それが現実と知りながら、夢の中で溺れている。

・そんなに50年も思い続けては生きていないと思う。この小説はわかりづらい。千代子が目に見える業績を残した人ではないので、寂聴さんは書きづらかつただろうと思う。

・母にあてた手紙。自分のことを書いた秋水の手紙を見ると、醒めるだろうが、最後は納得して世話をし、監視がついても気持がすわつて生きたと思う。

・「女人源氏物語」の書き方と同じ。

・普通の女性が見合をして、相手が幸徳秋水だつたという、大変な人生。臨場感がある。文体が合っている。最後まで秋水を信じている。千代子は彼の信念を信じていた。

・ひとりごとの文体、読みやすかつた。住井すすきさんは幸徳秋水が好きで、研修会に高知の人と一緒にいったとき、よくしてもらつたことを思い出した。

・人間とは、人によつて見せる顔が違うが、妻のことを母親に書いた手紙には驚く。

・このペーパーバック（『ゆきてかえらぬ』）はいい本。友人に配りたいと思つた。瀬戸内文学の入門になる。

★一羽だけ鴛鴦を描いた意味

・一羽は千代子自身。10年の結婚生活のあと、大半をひとりで過ごした。

・鴛鴦は秋水の肖像画ではないか。秋水のことを誇りに生きたのではないのか。

・鴛鴦がオスカメスカわからない。読者によつて受け止め方が違う。一対でないということが大事。

・鴛鴦は千代子本人。自画像と思つた。プライドを持つて生きた。想い出は支えになつただろうが、それだけでは生きていない。私はがんばつて生きてきたという思いを感じる。



ひろば 会員のたより

退職後はビーズ職人

生長まち

第二の人生はビーズ職人と決め、『工房 ChimaChima』を開設。幸いにも良き師に出会え、ビーズアクセサリ作りを学び、製作にいそしんでいる。周囲の方々のご厚意で展示する場所を紹介していただき、手作りの仲間とながり、ビーズ教室を開く後押し、受講生の募集までご協力いただいた。まさに、おんぶにだっこで感謝である。

「小さな物を作って目が疲れないか、肩が凝らないか」とよく言われる。しかし、ビーズには良いことがたくさんある。色彩は多様で美しい。一粒、二粒と数も数えるし、指先も使う、創造的で脳トレに最適だ。軽くて小さく場所を取らない。ビーズは文句を言わない。作品の数だけ成就感が味わえる。



長い歴史があり、奥が深い等々。

ビーズ教室を開いて2年が過ぎた。

集まる方々は習い事の達人が多い。習い事歴が少ない私は達人から学ぶことが山ほどある。同じ技術が習得でき、仕上がり異なるキットを人数分用意する。仕上がった人は必ず身に付けて鏡を見て微笑む。他の人に見せて賞賛を浴びる。合言葉は「自画自賛」そして「Enjoy Now」。寂聴さんの言葉では「切に生きる」だ。

3月にコミセンでビーズ教室の作品展を開き、皆でピースリングプロジェクトにも参加した。平和を願いビーズの指輪を作るという取り組みだが、世界中に広がっている。8月6日に米・モルオブアメリカにて世界中から集まったリング1マイル（1・6km）を繋ぎ、平和を祈るものだ。ビーズの語源は *bidan*（祈る）である。小さな一粒に世界平和を祈りつつ、「今」を生きている。



寂聴作品朗読

加茂コミュニティセンターにて

「山桜」出演

3月4日、寂聴記念会朗読グループ「山桜」（齋藤礼子、竹内紀子、藤村純子、森裕子）が、徳島市加茂コミュニティセンターの75歳以上の集まりに招かれ、徳島の民話をはじめ、寂聴の幼少時を描いた『あこがれ』などを朗読しました。参加者からは「幼い頃を思い出してなつかしかった」などの声が聞かれました。



寂聴のことば

書きながら女性に対する差別を感じるようになった。

明治の終わりから差別や不正を感じて闘ってきた女たちがいることもわかってきた。

「愛と革命」に殉じた伊藤野枝や菅野須賀子ら社会活動家たちのことを小説に書き出した。書きながら理解していった。書いているうちに私の思想ができていった。

『寂聴 97歳の遺言』

（2019 朝日新聞出版）より
（竹内紀子）

お知らせ

新年度になりましたので会費3000円の振込みをお願いします。

- ・阿波銀行 蔵本支店 普通 1229692 清重康代
 - ・徳島大正銀行 加茂名支店 普通 86601495 瀬戸内寂聴記念会 会計 清重康代
 - ・ゆうちょ 01660-2-5526 瀬戸内寂聴記念会
- 機関誌「寂聴」5号の原稿締切りは9月15日です。

瀬戸内寂聴記念会 事務局

〒770-0856 徳島市中洲町3-40-903（住所が変わりました）

Fax 088-661-3292

email kikanshi@setouchijakucho.com